
剣女ふたり

ara

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

剣女ふたり

【Nコード】

N7948M

【作者名】

ara

【あらすじ】

途方もない目標をもつ壮齡の女性・シフラは、妙齡の美女ミカルの窮地に立ち会う。双方とも、これが天命の邂逅になろうとは知る由もなく……

ようやく息吹かれた天命の邂逅（前書き）

初投稿です。

誤字・脱字・ルビ漏れ等には細心の注意を払っているつもりですが、もし見つけられた方は、遠慮なく指摘していただいて結構です。

若干、猟奇的な描写が含まれます。

不得手な方にはおすすめてできません。

ようやく息吹かれた天命の邂逅

剣女^{けんめ}ふたり

序章「炎狼のシフラ」

1、「炎の狼、殺戮^{さつりく}の宴」

シフラ＝マタティア、三十二歳。

現在は放浪剣士として、‘あるもの’をさがしつつ各国を旅している。

燃えるように赤く、狼のように刺々しい短髪。

不敵^{ふてき}な光と、強靱^{きようじん}な意志が宿る緑瞳^{りよくどう}。

精悍^{せいかん}な面差しは男とみまごう程に中性的^{ちゅうせいでき}で、尚^{なほ}且^{かつ}つ、鮮鋭^{せんえい}な美しさを有していた。

女性にしては逞^{たくま}しく、相当な長身の持ち主で、その膂力^{りよりよく}は大の男に引けをとらない。

そんな彼女は今日も、――「炎波剣^{えんはけん}」フランベルジュを駆^かり、凄惨^{さつりく}な殺戮^{さつりく}に身を委ねていた……………

ラバン盗賊団は、壊滅の憂^うき目に遭っていた。

かれらのアジトは今、ラングの草原のやや南西にある、目立たぬ名もなき洞窟の中にある。

草原ラングに通じかかる旅人から金品を奪いとる、小悪党の集団である。

彼らの首領・ラバンには、部下と異なり夢があるにはあった。
しかし、自らの軽率な行動が原因で、‘炎の狼’を呼び寄せてしま
うとは知る由もなかった……

ラバン盗賊団に属する誰よりも、彼女は背丈が高かった。
相対した者のほとんどが「大女……！」と震えながら呟いてしま
うほどに。

シフラ「マタティアは、すでにトビト盗賊団に属する男の半分を
絶息させていた」といっても、もとの人数は十人ちよつとだが。

「どらあああッ……！」
嵐のような暴威の雄叫びが、ならず者の耳朵をうつ。

「ひ……」
ザンツ！ と、そのならず者は恐怖の極みを全身に走らせたまま、
頭蓋を断ち切られてしまった。

仲間の惨状を見ている後方の男達はすでに戦意を喪失し、萎縮し
きつているのが明らかである。

「逃げるな屑ども……！」

「ひ、ひいいいいい！」

それでもなお迫る炎の旋風を逃れようと、盗賊どもは洞窟の奥へ
退いてゆくが

「逃げんじゃねえカス共」

こころもち低く発せられた洞間声は、迫りくる大女の口上とほぼ
同じだった。

「で、でもアニキ……え？」

「口答えすんじゃねえ」

口答えした部下の腹部に、深々とめりこむ大きめの剣。
それを引き抜かれるとともに、彼は滝のような血流を吐きだし、
またたく間に地に伏した。

ふと、それを視認したシフラは足を止める。

盗賊団の頭と思われる大男　　ラバンが立ち上がり、両手大剣を

手にこちらを睨みすえているのだ。

茶色の極短髪に、険の深い碧眼をもつ面差しは、小悪党の頭にしては案外な精悍さである。

シフラほどではないが、彼もまたたくましい長身の持ち主であった。

だが、その双眸には自信のなさを表す弱々しさが宿っているのも、シフラは見抜いている。

もう三人しかのこっていない彼の部下たちは、そそくさと二人の視界の外に移動し、怯えながら様子をうかがっていた。

「……………」

「……………」

ふたりの間には、底知れぬ殺気が火花を散らしていた。

だが、傍目にはまったくわからなくとも、当人たちの間で力の差は歴然としている。

シフラには、人間に関する様々なことから見抜く能力がある。

基本的な性格、戦闘能力、感情の傾向、克己心の強さ、敏捷・膂力・器用さ……………」

この頭目の挙動や、仕草や、言動、声色、眼差し、足運び……………」

それらを観察してシフラが思ったのは、彼は取るに足らぬということ。

そして、案の定　　ラバンは両手大剣を右手にもったまま、身を沈めたのである。

三人の部下は、驚嘆と失望、そして憤怒をないまぜにしたような眼差しを、自分たちの頭に向けていた。

「この通りだ……………」あんたが何者かしらねえが、俺の部下が勝手にちよっかいを出しやがって……………」

「部下のせいにするのかい……………」

シフラの声色はラバンを咎めてはいたが、戦闘時のそれと異なり随分とおちついていてる。

「あんたがしつかり賤けとかなかったのが悪いんだろ？」

「……………」

男は黙って頭を垂れている。

こうなった原因は、自分の部下が根城のそばを通りがかったこのくそ女にちよっかいを出したからだ、とラバンは思っている。

「まあ一番の敗因は、あたしを知らなかったことか……なんてね」

「……………」

茶色の地面を見つめながら、ラバンは頭の中に疑問符を浮かべる。

「どっちにしても」

大女はわざとらしくため息をつく。

「おまえらを赦すつもりなんざこれっぽっちもねえよ」

「ひ ひいいい！！」

部下の悲鳴。そして、刃が肉を絶つ生々しい音。

ラバンは膝をつき低頭しながら、それを恐怖に満ちた気持ちで聞くしかなかった。

頭目以外のならず者どもを殲滅したあと、シフラはゆっくりと口をうごかした。

「あんた、『部下がこの大女にちよっかいを出したからこんなことになった』と思ってるんだろ？」

「……………」

ラバンは依然として身体を縮みこませ、震えながら沈黙している。「じゃあ教えてやるよ。原因はおまえの身勝手な行動にある」

シフラの声音はいつのまにか憎悪をはらんでいた。

男はさらに震えはじめた。

歯の根がかみ合わず、ガチガチと音が鳴りはじめた。

「わかってんじゃねえか。自分がしでかしたことが」

「……………」

「かまえろ」

シフラは決然とした口調で命じた。

「おまえがしたことは死を以ってしか償えない。けど、そんな立派

な得物を持つてくるくせに、無抵抗で殺されるのはどうなんだ」

その科白^{せりふ}を耳にしたラバンは、僅^{わず}かにだが全身に力が行き渡る感覚をおぼえた。

右手にもっていた両手大剣^{ツヴァイハンダー}を握りなおし、ゆっくりと、立ち上がる。

そして、大女と眼が合った瞬間、彼の形相^{ぎやうしやう}は殺意一色に染まっていた。

「うらあああッ!!」

先刻のシフラに劣らぬほど叫びながら、渾身^{こんしん}の一振りを標的へとふるう！

ガイン！ という甲高い金属音は、しかし、シフラの炎波剣^{フランベルジュ}がラバンの両手大剣を弾き飛ばしたものだった。

それとほぼ同時に、大男の首が胴体から断ち切られていた。

2、「炎の狼、弱者の掟^{おきて}」

広大な草原ラングの中央にかまえる宿屋「翠^{みどり}の硝子^{ガラス}」に泊まったシフラ・マティアは、その主人の顔色が優れないのが気にかかり、それとなく何かあったのかと訊ねてみた。

主人は、旅の方に話せるようなことではありませんと言うが、シフラが身の上を明らかにすると、主人はかすかな希望を見いだした顔つきで、慎重に言葉を選びながらも事情を話しはじめた。

聞けば、三日前に一人娘が失踪したのだという。

だが主人には犯人がわかりきっていて、それは明らかに、ここに最近根城^{ねじろ}をはったラバン盗賊団のしわざなのだという。

その盗賊団はメロエ王国内を点々とする、小さな悪事ばかり働くちんけな集団だが、見つかりにくい場所を拠点にして移動するため、国の警邏隊^{けいらたい}ではなかなか尻尾がつかめないのだ。

というのは表向きの理由。

そんなやつかいな小悪党の集団へ人員を割くのに大した見返りはない、というのが本音である。

それでも主人は最寄の町の警邏隊本部へ足を運び、必死に食い下がったが、忙しいとか、犯人に確証が持てるまでは……などと言われ、突っ返されてしまつらしい。

シフラはその話を聞くと、「あたしに任せな」とだけ言い残し、なおも戸惑う主人をよそに宿を発つたのだ。

シフラがラバン盗賊団の棲家としていた洞窟の、最奥の部屋に足を踏み入れた当初、少女はひどく怯えていた。

天井には小さな穴が空いているらしく、一筋の陽光がせまい部屋を仄かに照らしている。

主人の娘　確か名前はリディアといったか　は、数日前までは人目をひく美少女だったのだろうが、憔悴^{せうすい}しきつた今はその美しさの殆どが損なわれているように感じられた。

短めの三つ網^{みつあみ}を顔の両側にたらし茶髪はちぢれて解^ほれ、閉じそうになる瞼^{まぶた}をかううじて開けているものの大きく形の良い碧眼には生気が灯^{とも}っていない。

ぼろぼろの寢床で上体をおこし、掛け布で華奢^{きゃしゃ}な身体を隠してこちらを見つめる様が、とても痛々しい。

主人には訊^きかなかったが、この娘の齡^{とし}はせいぜい十五ではないか……。

いまリディアはろくに頭を動かせない状態なのだろうと、シフラは推察^{すいさつ}した。

自分もそういう眼に遭^あったことがあるから、気持ちには痛いほどに理解できるのだ。

「……………」

シフラ　大女はふいにしゃがみ込み、それから　ほんの僅^{わず}かな不安を撥^はねつけながら　少女^{リディア}に見えるように、両手大剣を床に置いた。

先刻からずっと、リディアの視線はまったく定まることがない。

未だ彼女は、自分の身の上におこったことに対する、屈辱や恐慌、混乱に満ちて、それから抜け出せずにいた。

それでもリディアは、無言で、無表情で歩み進んでくるシフラが、怖いとは思わなかった。

まったく安堵していたわけではないが、彼女なら受け容れられると、少女はなんとなしに思った。

そしてシフラは、毛布をかけたままのリディアを、やさしく、ひとと抱きしめた。

リディアもまた、遅い躰の大きな女性を、小さな身体から力を振りしぼって抱きしめ返した。

すると自然と、少女の大きな眸から、涙がこぼれた。涙は次々と、とめどなく溢れでて……。

少女は堪えきれずに、小さな嗚咽をあげながら、シフラの肩に顔を埋めたのである……。

シフラとリディアが宿に着いたのは夕刻だった。

主人は屋内ではなく外にいた。

入り口ちかくにある花壇に水をやっている。

ふいに周囲を見渡そうとした主人が、娘を右手に抱いている女剣士の姿に気付いてじょうろ。

すでに気付いていた少女は大女の手から放たれて、父娘は互いに駆け寄った。

「おお、リディア……！」

「お父さん……！」

対面を果たし、抱きしめあう父娘の姿を、シフラは厳かな表情で見つめている。

特に父親の顔を注視していたのだが、女は鼓動を高ぶらせながらも、ほっと胸を撫で下ろしていた。

彼はどうやら信用できそうだ。

「……………」

無言で立ち去ろうとしたシフラだが、主人はそれを見咎めて「マ
タティアどの！」と呼び止めた。

仕方なくゆっくりと振り向いた女の眼に、人の良さそうなキツネ
顔の男と、素朴そぼくであどけない少女の顔が映し出される。

ふたりの顔には、自分に対する感謝の気持ち、ひかえめな笑み
となって面に出ていた。

「本当に、ありがとうございます」

主人が深々と低頭してくる。

「ありがとうございます」

娘も父に倣ならって頭を下げる。

「……………」

大女は無言でそれを見つめていたが、ふたたび背を向けると、低
い声でこう言い残した。

「礼はいらない。……………お嬢ちゃんを助けてやれなくて、すまな
かった」

「「え……………？」」

父娘はそろって疑念を發した。

だが、父はシフラの台詞の本意をすぐに察することができている。

彼女シフラは……………リディアが辱めはづかしられる前に助けられなかったことに、
憤りいきどおを感じているのだろう。

もちろん、彼とてそうなるまえに助けたかったのが本音だ。

娘は今でこそ落ちついていいるが、今回体験したことは将来を考え
る上で重荷となつてのしかかるのだろう。

帰ってきたリディアと顔を合わせたとき、一抹いちまつの不安があつた。
自分は否定されるのではないか、と。

男の怖さや醜さを散々に見せつけられた彼女が、親といえども男
である自分を受け入れてくれるのか。

それでも彼女が一目散に飛び込んできてくれたのは、やはり自分
が父として、娘をまっとうに育てたのが報われたのだと彼は思つて

いた。

つまり、娘にとって自分は男ではあるが、親であり、なにより特別な存在として認識してくれていたのだ。

おそらく自分以外の異性と正常に接するのには、相当な時間がかかってしまうだろう。

それを理解^{わか}っていたから、先刻シフラがやや険しい表情で自分の様子をうかがっていたのに気付いても、腹は立たなかった。

妻に先立たれた自分が娘に変な気を起こしていないか、見張っていたのだろう。

あの様子だと、彼女も同じような被害を受けたのだろうか……。
そう思うと、壮^{そうれい}齡の男はとても複雑な気持ちになった。

赤の他人である自分とその娘を、そこまで想ってくれる放浪者としてののは初めてみた。

その世界’で「炎狼のシフラ」はとても有名らしいが、ならば尚^{なほさ}更^じ氣になるというものだ。

一体なぜ、何のために、彼女はあてのない旅を続けているのだろうか……。

一章「ようやく息吹^{いぶ}かれた天命の邂逅^{かいこう}」

1、「孤独な狼の苦悩」

シフラ＝マタティアは、宿屋から十分に離れた岩陰まで来ると、きわめて用心深く周囲をうかがった。

そして、人の気配がまったくないと確信したのち。

彼女は右手で腹を強くおさえ、地面に両膝をついた。

呼吸は荒く、表情は明らかな嫌悪に歪んでいる。

「はあ……………はあ……………」

強烈な腹痛が彼女を苦しめていた。

（またあのことを思い出させやがって……！ いや、違う……

あたしが勝手に思い出したんじゃないか……）

リディアを見たシフラは、遠い過去の出来事を脳裏によぎらせてしまったのだ。

思い出したくはないが、それでも乗りこえねば強くなれないあの体験……。

今のシフラはそういう場面を切り抜けられるどころか、他者を助けられるほどの力を身につけた。

だが、過去に自分がそういった眼に遭った時のことは、きわめて鮮明な記憶として脳裏に刻まれており、未だシフラの心を蝕んでいた。

「……………くそっ！！」

胃からこみあげる吐き気を否定するように、右拳を土の地面に叩きつけた。

未だ克服できない自分の弱さが、異様なほどに腹立たしかった。

一時間後。

シフラはある方法を用いるなどしてようやく落ち着くと、さつそく隣国パルミラを目指して街道を北上しはじめた。

彼女は放浪剣士を自称し、傭兵として生活の糧を稼ぎながら各国を旅している。

炎のような赤い短髪や、真紅に染まった剣・フランベルジュを振るい、雄叫びをあげて敵を仕留める姿から、「炎狼」の異名を取る。そんな彼女には、特に行きたいところ、行くべきところはない。ある目標を持ち、それに向かって緩慢に、半ば気ままに、半ば悩みながら進んでいるだけだ。

大きな不安を抱きつづけながら旅程を歩むのはよくない。

精神的にはもちろん、肉体的にもひびくのだ。

だからシフラは、自分に重圧をかけないように目的を遂行しようと思った。

幸い時間はある。

急ぐ旅じゃない。

彼女は自身にそう言い聞かせながら、メロエ国边境の森・ファロスに足を踏み入れた。

森に侵入して五分とたたないうちに、彼女はただならぬ気配を感じとった。

やや吊りあがったすごい眼光が、注意ぶかく周囲や森の奥を凝視し、肌に感覚を走らせて何事かをさぐる。

解ったのは、人が複数いて、一人が二人から敵意を向けられているらしいということ。

シフラは武者震いした。

久しぶりに手応えのありそうな場面に立ち会えそうだからだ。

女は走った。

その大柄かつ堅固な身体をもつ女の走りは、うごきに一切の無駄がないだけでなく、音がほとんど殺されていた。

彼女の場合、意識すれば歩きも走りも足音にたいした差異はない。それだけの修練を積んでいるからだ。

やがて、緊張感が高まる者達がいる、およそ三十歩手前でシフラは足を止めた。

そして、背の炎波剣の柄をにぎり、大木に身をかくしつつ彼らの様子を窺った……

2、「ようやく息吹かれた天命の邂逅」

「どうしてもというのですか、フィリポスさん」

「……………」

「……………何とか言ったらどうなんだ」

「あまり口を噤つぐまれては意思疎通が図れません。私たちは貴女を連れ戻すよう、首領おおから仰せつかっているのですから」

「……………」

「……おい、黙ってちゃわかんねえだろ！ 何とか言えミカル！」

シフラが目にしたのは、浮世うきよ離れた美しい女性が、屈強な大男と、線が細い美少女になにやら詰め寄られている場面だった。

美女は露出度がおおい東洋剣士風の白い衣装、男は脚衣・上衣とも薄紫の戦装束いくさく、美少女はなぜかシスターが身につける純白の法衣ほうえをまとっている。

全員が趣向しゅうこうの異なる剣を帯びており、物々しい雰囲気が発せられている。

なかでも沈黙を守り通している青髪の女性からは、しかしシフラが人目みただけで強烈な印象を与えた。

抜群に美しい女性であったのもそうだが、何よりもシフラにとって際立つたのは、彼女 ミカル「フィリポス が絶対的な強者にみえたからだ。

あの大男と美少女の二人がかりでようやく勝てるかどうか。

だからこそ、「首領から貴女を連れ戻すよう仰せつかっている」のだろう。

そして、あたしは彼女とは五分……………いや。

シフラは私情を除き、自分に正直になろうとした。

それによれば、わずかに いや、ほとんどミカルに軍配が上がるとのことだった。

百本打ち合えば、間違いなく七十本は彼女にとられるだろう。

そう、だから シフラはミカルを引き入れようと思いだめた。彼女を仲間にする事で、何かが得られる、予感がしたのだ。

他人をつゆほども信用しないシフラだが、むろんミカルも同様で

ある。

口を巧く使^{うま}って味方にし、利用してやるのだ。

一筋縄ではいかなそうだが、幸い「今」という好機に巡り会えたらしい。

逃すつもりはない

「おいコラ、ミカルてめえ！ うんとかすんとか言ったらどうだ！

！」

精悍^{せいかん}かつ野生的な顔立ちの男は怒鳴りつけるなり、背に帯剣^{たいけん}している両手大剣^{ツブアイハンダー}の柄を右手でにぎった。

鼻息が荒く、いまにも斬りかかりそうな雰囲気^{かも}を醸^{かも}しているが、シフラには解る。

恐怖をこまかす為^{きよせい}の虚勢^{きよせい}だと。

「ヴァシヤさん！」

美少女が澄んだ声音で大男を制する。

「わかってんよサフィちゃん。けどな、こいつには実力行使しかねえよ！ 二人がかりでやりやあ押さえられんだろ……！」

自分をちらとも見ようとしない男に、美少女 サフィは、ほとんど感情を出さずにかぶりをふった。

押さえられるわけないでしょう。殺^{ころ}すのが精一杯です

彼女の視線はそう訴えかけているようにみえた。

そのあいだも美しい女剣士は黙したまま、吸い込まれそうに黒い眼で二人を見つめているが、シフラはこれも相当に奇妙な感じを覚えた。

一何の感情も読み取れない《……………》のだ。

ミカルの端麗^{たんれい}な面差しをどれだけ注視しても、正直、何も考えていないようにしか考えられない。

焦燥、恐怖、高揚^{こうよう}、軽侮^{けいぶ}…………… 自分がこういう状況で抱きそう

な感情を並べてみたが、そのいずれも彼女にはなさそうだった。

無表情というだけではない何かがミカルにはある。

大男は舌打ちした。

「……じゃあどうしろってんだ、あん？ こいつはついてくる気ねえんだぞ！」

「ツいてはイかない」
唐突に。

ミカルが口をひらいた。

なぜか、一瞬時間が止まったような感覚をおぼえたシフラだったが、それはあの二人も感じたことだろう。

「……あんだって？」

美少女サフィにヴァシヤと呼ばれた男が、こころもち頓狂^{とんきやう}とした声で訊きかえず。

「わたしはくにをデる」

ミカルの声質はやや掠^{かす}れているうえ抑揚^{よくよう}がなく、低く呟^{ささ}くような声音だったが、いかなる訳かはつきり聞き取れる不思議なものだった。

「何の為に？」

サフィは身体でヴァシヤを抑えつつも、即問い返した。

「かれをスクうために」

ここでシフラはふと、ミカルがある種の対人障害者^{いちじゆう}なのではないかと推察^{すいさつ}した。

一度に長い言葉をつむぐことが出来ない。

常人と比較して、頭に浮かぶ思考を言語化するのに著^{いちじゆう}しく時間がかかる。

これはやつかいだ。

「あの方を救う？ どんな手段を用いてですか？」

それを知っているから、サフィも辛抱強く一語一語ていねいに聞きとり、また話しているようにみえた。

「それにはコタえられない」

明瞭^{めいりょう}な声で言ったミカル。

サフィは一拍おいてから、「どうして？」と問うた。

また一拍おいて、答えが返ってくる。

「あなたたちには、に、がオモい」

ヴァシヤがあからさまに顔をしかめた。

怒りというよりは疑念が強そうな表情だった。

「……ちよつと待てよ。なんでアシエルが救われる対象なんだ？」

ヴァシヤが誰にともなく訊ねる。

シフラはここで情報を整理した。

美女ミカルのいう「かれ」、美少女サフィのいう「あの方」、それが大男ヴァシヤのいう「アシエル」という人物だろう。

おそらくアシエルという男は、ミカル・サフィ・ヴァシヤを何らかの組織に囲っている首領で、その彼をミカルが「救う」のだという。

だが、ヴァシヤはそれに対しあきらかな疑問を抱いている。

「まさかお前、あいつの才能が病気で、それを治そうとかいうんじゃないねえだろうな？」

男は頑健な身体をふるわせながら言った。

三人　シフラ・サフィ・ヴァシヤは、緊張感を高めてミカルの言葉を待つ。

やがて、美女の口がゆつくりと動きはじめた。

「あなたたちもスクウ」

………！？？

三人は一樣に疑問符をうかべた。

「……………それは、まさか」

「あいつがオレらを手にかけるつてのかオイ？！　そう言いたいんだなミカル！！」

サフィは一瞬だけ天をあおいだ。

ヴァシヤは激昂しながらも斬りかかりたくなるのをおさえ、ミカルの返答を待つ。

十ほど数え、ようやく言葉を綴りだした。

「みんなをスクウ。わたしはくいをデる」

ミカルはヴァシヤの質問には答えていなかった。

その台詞をきいたサフィはもう、彼女との意思疎通は不可能に近いとおもった。

ミカルは何があるうとメロエ国を脱するつもりだ。

二人が実力行使に出ようが、力づくでこじ開けようという確固たる意志がうかがえた。

けれど自分たちも、首領アシエルにミカルを連れ帰ってくるよう厳命されている。

サフィは覚悟を決めた。

「申し訳ありませんが」

言下に、美少女は腰に帯びていた細身剣レイピアをスラリと抜きはなち、独特の構えをとった。

「少し怪我をしてもらうことになるかもしれません。ヴァシャさん」
「おう！」

大男は嬉しそうだった。

「彼女の武器を狙ってください。私は腕を狙います」

「わかったぜ」

「但し、全力で。彼女の力は十分にご存知でしょう」

「嫌というほど、なっ」

言いながら、ヴァシャはそのたくましい体躯たいくにふさわしい両手大剣ダイを抜きはなち、切っ先をミカルにむけた。

「……………」

その光景を見守っていたシフラは助勢じよせいするべく、密かに三人へと接近しはじめたものの、ミカルの度胸にはしかし感心せざるをえなかった。

二人はすでに殺気をびりびりと放っているのに、全く動じている様子がない。

おそらく、本当に動じていないのだろう。

自分が同じ状況におかれたら、表情には全くださなくとも内心の怯えおびや恐れを完全にけすことはできないだろう。

それだけに、ミカルの精神構造にはさまざまな意味で興をそそ

られた。

ふと気がつくと、ミカルはいつのまにか左腰の帯剣を右手ににぎり、やや中腰になる、いわゆる脇構えをとっていた。

そして、全く変化をみせない童顔のまま、低く明瞭な声でつぶやいた。

「しかたがない、あなたたちをトめる」

「まあ待ちなつて」

あまりにも気楽な　しかし、力強い女性の声のほうを、サフィとヴァシャが振りむく。

シフラはすでに炎波剣を振りかぶり、さらにその間にミカルが背後から二人に急接近としていた。

「んなつ……！」

「くつ……」

二人はろくに身構えることすら叶わなかった。

「ふっ！」

ガイイン！！

ヴァシャは両手大剣でシフラの炎波剣を受け、激しい金属音を残して剣を離してしまった。

女はそのまま男の右手甲を突きさし、股間を思いきり蹴りあげる。

「ぐえ……」

彼は軽くうめきながらくずれ落ちた。

ミカルはすでにサフィから細身剣を撥ねあげており、呆然と立ちつくす美少女の首筋に、風変わりな剣の切っ先を突きつけている。

「……参りました」

サフィは、うずくまっているヴァシャをちらと見てからいさぎよく負けを認め、両手を後頭部においた。

ものの十数秒で決着がついた。

「あなたは」

と、美女はサファイからまったく眼をそらさないまま、シフラに話しかけてきた。

剣を交えたことによる緊張感や余韻よゐんなどおかまいなしというミカルの物腰に、シフラは感心した

「……ん？ なんだい？」

「わたしのみかた」

ほんの一瞬、大女はミカルの言葉が意図するものを理解できなかったが、すぐに微笑に転じて頷いてみせた。

そして、シフラは彼女の器量きりようにあらためて感心していた。

口を利くどころか顔さえ合わせたことがない自分と、ぴったりに息をあわせて障害を取りのぞいてみせたのだ。

ますます彼女を引き入れたいという気持ちが強くなった。

「一応、そういうことになるんじゃないかい？」

「……おい」

「……うん？」

シフラは視界を下方に転じると、痛みと屈辱を耐えしのぶように歯噛みする大男が、うつすらと涙を浮かべながら自分をねめついている光景が映しだされた。

少し哀れさを感じたが、それを口にしたら彼はさらに憤慨するだろう。

「ふざけやがつて！なんでそいつの味方すんだよ……！」

「さあ、なんだろうね？」

「な、何い！？」

「二対一はフェアじゃないと思うね。だからあたしが彼女につけば、ちょうど同数になるだろ？」

「挟み撃ちと不意打ち同時にくらわしといて、フェアも何もあったもんじゃねえだろうが……！」

ヴァシヤの猛抗議に対し、シフラは盛大に吹きだした。

「何がおかしい?!」

「うるさいねえ、そんなこたあどうだっていいだろ」

男の抗議を一蹴し、

「そっちのお嬢ちゃん」

今度は視線を美少女へと転じながら言葉をとめ、意味ありげな破顔^{がんと}を湛^{たた}えながらささやいた。

「あたしはこの子をつれてくけど、今^{いま}だけは見逃してくれるよねえ？」

「……………」

「今だけは」とはどういうことだろう？

しかし、今のサフィには選択肢などふたつにひとつであることは自明^{じめい}だった。

組織に帰って今後の検討をするほかない

「……ええ。今は見逃してさし上げます」

「物わかりが良くてけっこう」

「ハヤクイク」

ミカルに手を　それかなり強く引っぱられ、シフラは苦笑した。

「わかったよ。じゃあね、お二人さん　あ、そうそう」

女は思い出したように美少女のほうを振りかえり、得意げに言った。

「その女装と声、完璧だったよ。世界中さがしても、見破れるのはあたし含めて三人程度だと思うから、心配しなくてもいいんじゃないかい？」

サフィもヴァシャも、そのセリフの意味へ得心^{とくしん}がいくのにもいつも
の四、五倍の時間を要した。

ようやく理解したとき、かれらはほぼ同時に彼女の正体呼びおこし、とんでもないやつを敵に回したと自覚したのである。

「『炎狼^{えんろう}のシフラ』……………!」

ようやく息吹かれた天命の邂逅（後書き）

俺の拙作に目を通していただいた方に、心から、ありがとうございます！
ます！！

狂気の審判が下された（前書き）

やや残虐な描写がありますのでご注意を

狂気の審判が下された

二章 「狂気の審判が下された」

1、女装少年と虎男

メロエ国北端・ファロスの森で、美少女と大男の二人組がおおきな切り株にすわりこみ、なにやら話しこんでいる。

春陽が射す青天井のもと、木々の上のほうでは様々な鳥が囀っており、シスターの少女・サフィラトリフォンはそれを切なげに見あげながらも、目を瞑ってため息をついていた。

「看破されていましたか……………」

その声は、先刻までの少女のような澄んだ声色ではなく、十八の少年のそれになっていた。

隣には目つきの悪い傭兵ラザロヴァシャが座っており、いまだに痛むのであろう股間をさすっている。

「私はこの女装にはそうとう自信があつたのですが、こつも簡単に見透かされてしまうと、揺らいでしまいます……………」

そう。

実はこのサフィラ、見た目こそ完膚なきまでの美少女だが、れっきとした男である。

サフィラトリフォンというのも首領アシエルから与えられた偽名で、本名は彼自身しか知らない。

シスターの法衣をいくつも重ね着しているのも、身体の線がうきでて怪しまれないための工夫なのだ。

さらに声帯を操ることもできるため、ほぼ完璧に「女」を演じることができる。

男と床を共にするまでは。

「サフィちゃんはまだいいよ。オレなんかタマ蹴りくらったんだぜ、

タマ蹴り！ あの女、全く躊躇^{ためら}いなく蹴りあげがった！」

「鞆丸^{こづがん}は確かに痛いすよね……」

覚えがあるのか、美少女 いや、美少年はあさつての方を見てからぶるつと震えた。

「あれは天変地異^{てんぺんちい}並みの破壊力ですよ……」

「天変地異^{てんぺんちい}どこじゃねえ、国家破滅^{こっかはめつきゅう}級だ。……いや、それにしても」

ふいに、極短髪^{ベリショート}の男からまじまじ見つめられた女装少年は、やや恥ずかしそうに眼をふせた。

「……な、なんですか？」

「いや、こんなかわいいコが真剣に『鞆丸は痛いすよねえ……』なんて言ったら、夢が壊れると思うんだぜ」

「ちょ、ちよつとヴァシャさん、やめてくださいよ！」

美少年は顔を真っ赤にして抗議したが、彼のその反応は演技にちかいものがあると知っているから、男はさして気にしなかった。

「いやそれにしてもよ、真面目な話、あいつの力ッコは反則だよな」
「……………ええ、まあ」

サフィラはその話題に乗り気ではなさそうだった。

「あいつ」とはミカルのことで、彼女の服は動きやすさ重視のためか軽装備で、露出度がおおい。

やや胸元がひらいた短いそでの羽織^{はおり}、左脚にふかいスリットが入った脚衣はともに深緑色。

彼女のプロポーションの良さも手伝って 特に胸が目立つほど大きいので 確かにかなり刺激的な容貌^{ようばう}といえるかもしれない。

「オレさあ、あの乳に眼えいかなないようにすんのに必死なんだけど、ついついっちゃうんだよな。なあ、サフィちゃんもそうだろう？」
「そうですかね……………」

サフィラはラザロに顔を見られないように言った。

正直、気持ち悪いですよ と思っていても、言うに言えないのが彼の短所であり、長所でもある。

「そうだろう？ 別に戦いの場じゃなければ、いくら見ようがアイ

ツ気にしねえから見まくってやるけどよ」

「……いえ、一緒に行動する時でも見ませんよ。見たくはありませんから……見たくもありま　あ、いや、それより……問題はシフラ「マタティアをどう対処するかでしょう」

「……そうだな。ヤツには借りがある」

男は、自分の失言をなんとか取りつくろった美少年を、これ以上いじろうとはしなかった。

「ただ、これはオレの見立てだが、ヤツは多分ミカルより強い」

「……ヴァシヤさんもそう思われましたか」

「おまえもか」

サファイラはこくと頷いた。

そして、二人は視線を重ねてしばし牽制しあった。

おたがいに対し、あまり口にはしたくない懸念事項をどう伝え、動かしようのない事実としてどう対応すべきなのか。

獐猛な虎のごとき顔貌に乱暴な口調のラザロだが、思いのほか融通はきくらしい。

先に口をひらいたのは、隆々とした体格をもつ男のほうだった。

「こりゃあ、アシエルにはある程度正直に言うしかねえよ。オレらがどうこう出来そうな問題じゃねえ」

「……悔しいですけど、その通りですね」

「相当焦げ臭くなってきた感じだな。けどよ、久しぶりに楽しめそうじゃねえか？」

「ヴァシヤさんですか。　私も同感です」

二人は笑いあった。

気負いなどというものは微塵にも感じられない。

なぜなら、二人とも闘うことが　特に強者と刃をまじえるのが好きだからだ。

だからこそ暗殺組織「《煉獄の剣》」に招かれたのだが……

「とにかく組織に戻ろうや。ここですつとくつちゃべってても埒があかねえ」

「ええ、そうですね」

二人は切り株から腰をあげ、メロエ国边境の森を脱するべく歩みだした。

彼らにしては珍しいことに 黒衣を纏った者が上方から監視していたのには、まったく気づいていないようだった……………

2、暗殺組織「煉獄の剣」

中性的な面差しの大女シフラ「マティアと、彼女より頭ひとつ半も低い美女ミカル」フィリポスは、すでに国境をこえ、寒冷荒野の小国・パルミラの地を踏んでいた。

関所の門をくぐると、低い岩山にかこまれている野道が、地平線のかなたまで続いている。

門番の話によると、ここからは道が分かれることなく、六時間ほどで石の街タルシエンに着くのだという。

今はまだ昼を過ぎたばかりだし、彼女らの足は常人のそれとは異なる。

夕刻まえにはタルシエンに到着できるだろう。

「ところで、まだ名前を訊いてなかったね」

あの二人を撒いてから初めて口をひらいたのは、しなやかな長身を有する女剣士のほうだった。

「いちおう訊いとくけど、あたしが誰か、知ってるかい？」

ミカルは首を、ぐりん！ と、異様に速くまわして、シフラの顔を凝視してきた。

女はやや呆れ顔で「不気味だねえ……………」と思った。

そして、美女は表情をまったく変えずに答える。

「知らない」

「……………」

予想通りの回答を得られたにもかかわらず、シフラは少し後悔していた。

ミカルはおそらく、嘘が必要とあらば平気でつけるような胆力たんりよくの持ち主だ。……根拠はないが、なんとなく。

そして……これも何となくだが、自分の嘘は見抜かれそうな気がする。

確証がもてないことは嫌うシフラだが、何しろ相手はいままで触れたことがない人種だ。

こんなにも心が読めず、言動や行動基準の予測がつかない者を相手にしたことはない。

また何より、こんな 特殊な対人障害者のような 人格が、まるで演技ではなさそうなのが最もやっかいなところだ。

仕方がないので、偽名ぎめいを使おうという当初の予定を変更し、知っているかもわからない実名で名乗ることにした。

「あたしはシフラ」マタティアさ。名前くらい聞いたことはあるんじゃないかい？」

一拍いっぱくおいて答えが返ってくる。

「ナイ」

さてこれは本当なのか などと、いくら考えても答えはなさそうなので、次に移ることにする。

「あんたの名前は？」

一拍おいて答えが返ってくる。

「ミカル」フィリポス」

聞いたことがない名だが、メロエ国の一般的な姓名せいめいだ。

が、確実に偽名だろう。

どうみても東国とうこくが故郷の人間なのだから、実名はもっと特殊な響きを持つ姓名であるはずだ。

まあ瑣末さまつな事項だけどね、とシフラは割りきることにした。

「じゃあミカル、ひとつ訊きたいことがあるんだ。あんたが所属してた組織ってのは……………」

女はふいに默然^{もくぜん}として、背の炎波剣^{フランベルジュ}の柄を右手でつかんだ。

人に視られているのを感じたからだ　　が、眼前の美女はまったく警戒していないようだった。

シフラはやや焦りを感じた。

「……ちよつとあんた、誰かがあたし達を　　」

大きな違和感に、彼女はふたたび、今度はかすかな上がり眼を見開いて沈黙した。

ミカルが笑っている。

いや、無表情なのだが、笑っているように見えるのだ。

なにゆえそう見えたかシフラにはまったく分らなかったが、なんとなしに安堵感^{あんどかん}を覚えるような笑みだった。

まもなく、その者は表れた。

西の岩山から唐突に姿を表したのは、先刻遭遇したシスターの美少女　　いや、美少年よりふたつみつつ年下の、どこにでもいそうな垢^{あかぬ}抜けた少女だった。

だが、その身のこなしはただものじゃない。

おそらく盗賊かなにかを生業^{なりわい}とする、隠密行動^{おんみつ}に長^たけていそうな者の動きだ。

格好はといえば、肩を剥^むきだしにした麻布^{あふ}の上衣^{じょうい}に、上腕^{じょうぶ}までを保護する長手袋、膝までのスカート、腰までたらしたマフラー、いずれも黒だが、やはり盗賊風^{シーフ・スタイル}に相当する軽装である。

シフラは、隣にたつ女剣士がその少女をまったく警戒していないのに気づいた。

自分たちより力が劣るから、ではなく、仲間なのだろう、と女は思った。

岩山を身軽におりた少女は、二人の女性から二十歩ほど離れたところから声をかけてきた。

「やつほう、姉さんたち。お元気イ？」

軽いねえ……とシフラは感じた。

少女の雰囲気^{けいけい}の軽さは、警戒^{けいかい}を解くためもあるが、表面的にはい

つも明るく振る舞っているのも原因のひとつだろう。

そして驚いたことに、真っ先に言葉をつむいだのは美女剣士のほうだった。

「げんき。 リベカは」

「あたしも元気。そっちのお姉さん ええと、マタティアさんは？」

「ちよつとあんた」

シフラはミカルに言ったのと同じ台詞で少女 リベカを呼びつけた。

「え、なに？」

「なに？ じゃないよ。いくらなんでも無警戒が過ぎるんじゃないかい？ あたしの事を知ってるなら尚更さ」

「そんなことないよ……………ないですよ。だって、ミカがマタティアさんを引き連れてるんですから」

むしろあたしがこの子を引き連れてるつもりなんだけどね とは口に出さなかった。

「ま、いいさ。 で、なんであんたはあたしらんここに来たんだい？」

「じょうほうがかり」

ミカルが口をはさんできた。

「それと、髪梳き係もね」

リベカはウィンクしてみせた。

シフラはため息をつきそうになって、なんとか踏みとどまった。

「じゃあ、要するに味方なんだね？」

「そんなの、こうしてのほほんと話してる時点で自明じめいじゃないですか」

「言うねあんた。……………けど、じゃあなんでいつまでもそこにいるのさ？」

「だってさっきからシフラ……………マタティアさん剣握ってるし」

「 ホラ離れたよ……………別に襲う気もないし。というかあんた、さ

つきから人を敬^{つやま}うのか馴^なれ馴^なれしくすんのか、ハッキリしないねえ」
「そんなことありませんよ」

言^{げん}下に少女はにこつと微笑むと、唐突に歩みだし、距離を詰めてきた。

十五歩、十歩、五歩とみるみるうちに差は縮^{ちぢ}まり、あつという間に大女の眼前に移動していた。

「あたし、こう見えてマタティアさんのこと尊敬してるんですよ？」
「……………あんたねえ、そんなことばかりしてちゃ長生きしないよ」

「ミカを信賴してますから。ミカと一緒に歩いてるマタティアさんが、いきなりあたしを斬ると思えませんし……………あ、それよりミカ！」

ミカルはのろのろとリベカの方を向き、「なに」と言った。
あの剣の冴^さえを見せられた後だと、この挙動^{きょどう}が演技に思えてならない。

「髪、梳いてあげる。ほら、ちょっと縮^{ちぢ}れてきたし」
「アリガトウ」

ミカルは、腰ほどもある長くきれいな青髪をたなびかせながら、リベカに背を向けた。

それにしても、この少女の言い草には引^ひっかかるものを感じたシフラだった。

自分を尊敬し、ミカルを信賴すると彼女は言ったが、つまり自分は信賴されておらず、またミカルは尊敬されていないということだ（と思う）。

シフラは、別に自分が信賴されないことについては構わないと思っっている。

なぜなら彼女自身、全く人を信用できないから。

だから　これは何となくだが　自分と同じく他者とはほどほどにしか付き合わなさそうなりベカが、はつきり人^{ミカル}を信じるというのには大いに違和感があった。

「ほら出来た！ やっぱり、ミカは髪質良いわよね。魔法の櫛で梳かなくてもいいんじゃないかってくらい」

「魔法の櫛？」

聞き慣れない単語に反応するシフラ。

「うん、ある遺跡で見つけたんですけど、どんな仕掛けなのか、ものの凄く髪がサラサラになるんです。だから魔法の櫛って呼んでます」
「へえ……ま、あたしにはいらなそうだけど………というか」

言葉を切ったシフラは、真顔でリベカを見すえた。

「そろそろ本題に入ってくれないかい？ この子からきいてもいいんだけど時間がかかりそうだし……何か用があつてあたしらの所に来たんだろ？」

少女も瞬時に真顔になってうなずき、美女の艶麗なおもてをちらと窺ってから口を開きはじめた。

「もともと、あたしはミカに言いたいことがあつてきたんです。マタイアさんを仲間にしたとは知りませんでしたから、内心驚きましたよ」

「ごめんねえ」

シフラはいちおう、低い声で謝った。

「いやいや、そんなに気にしないで下さい。

ただ、ミカとマタイアさんが一緒にいる理由を なんとなく察せるんですが 掻い摘んで教えていただけませんか？」

「いいよ」

シフラは微笑み、あつさりと許諾した。

ちよつとこの子を試してやるうか、という腹だったシフラだが、それが当人に割れているかいないかは瑣末なことだった。

「あたしがメロエ国边境の森・ファロスに入った時、偶然ミカルとその仲間達に出くわしたのさ。

腕が立ちそうな傭兵の大男と、緊張感のある場にそぐわない可愛らしいシスター、の二人にこの子が詰め寄られてね。

気配を殺して話をきくと、どうもキナ臭い話が聞えてくる。

この子と傭兵とシスターはなんらかの組織に入ってて、その首領を「スクウため」にメロエ国を出るのだとその子は言う。

でも、傭兵とシスターはその言葉を拒絶して、力づくでもこの子を止めようとした。

あたしは一目みた時からこの子の強さを見抜いてたけど、それでも腕がたつあの二人を同時に相手するのは分が悪い。だから助けようと思ったのさ」

「理由になってないですよ」

リベカは平時へいじと変わらぬ声音で指摘しつぎした。

シフラは大した子だと思いながら、理由を述べる。

「言うと思ったよ。」

理由は簡単さ。この子に興味が湧いた。それだけっちゃんあなんだけど、本当にそれだけなのさ。

だから、彼女を助けるのは仲間にするのが目的だったんだ」

間近で話をきいている筈はず（のミカルは、さっきからずっと無表情で直立不動のままだ。

リベカは女の話のひとつと聞きおえると静かに瞑目めいもくし、なにかなんかに思惟しゆいに耽ふけつてから口をひらいた。

「事情はわかりました。」

あたしも掻い摘んで『あたし達のこと』を話します。

マタティアさんが出くわしたシスターと傭兵、それにミカとあたしは、『煉獄れんごくの剣こるぎ』という暗殺組織の一員です」

「知ってるよ」

シフラはあっけらかんと言いつつ放った。

「あの二人の会話からそれは読み取れた」

「……優れた洞察眼どうさつがんと知識をお持ちですね」

「まあね」

賛辞さんじに対し淡々たんたんと応えたシフラ。

「では、『煉獄の剣』のことは省はぶいて、ミカと一緒にマタティアさんにも組織内部の情報を教えます」

「都合の悪そうなたあ言わなくていいよ。あたしや部外者なんだからね」

「ええ、最初からそのつもりです」

「言っねあんだ」

そうして、少女は『煉獄の剣』に何が起こっているのか、ゆつくりと話し始めた……

「最近、首領の様子がおかしいんです。

おかしいといえば、まあ最初からなんだけ……ですが、最近は雰囲気か　　というか殺意が　　あたし達に向けられている気がするんです」

女は少女の声に震えが帯びたのを聞き逃さなかった。

「なんとなく分かったとは思いますが、あの人は　　仮にそういう病気があるとするならば　　『殺人中毒者』です。

というよりは、血がもの凄く好きな人で、さらに特殊と言えるのは、必要な量だけの理性が働くところでしょうか。

人を殺すのに、殺すと自分に大きな害が及ぶ、と分かっている相手には手を出しません。

つまり、そうでない人間　　主にお尋ね者を中心^{たず}に標的をしばります。

およそ四年間、彼らはそうしてきたそうです　　というのは、あたしは二ヶ月前に入ったばかりなのでそうとしか言えません。

それが、です。

ここ数週間、あたしたちにまで殺意が放たれている気がするんです。

ごく僅かなものなのであたしも気づきませんでした^{わず}が、密かにミカが教えてくれて分かりました。

おそらくですが、他のメンバーはまさか首領が自分たちを殺そうとしているなどとは露^{つゆ}ほども考えていないと思います。

そして三日前。

ミカはある街での仕事のあと、組織に戻ることなく突如失踪しました。

何をするのか、あたしにだけ言い残して……」

長い長い口上をおえると、少女はふうと息をついた。

腕を組んで話を聞いていたシフラは、リベカの語る内容に多くの違和感を覚えながらそれを口には出さず、ひとつ質問をした。

「あんたはこの事態に対して、どうするつもりなんだい？」

少女は再び息をつき、女をまっすぐ見すえて答えた。

「ミカにつきたいと思ってます」

「ふうん……」

適当に相槌をうったシフラだが、すでに勘付いていた。
リベカが虚を弄しているということ。

彼女は最初から仲間にするつもりなどないが、とにかくなんとかしてミカルと「煉獄の剣」の縁を断ち切らねばならない。

ミカルとリベカがいかに仲良かろうと、邪魔なものは強引に排除する。

それがシフラ流だ。

「ところでマタティアさん、少しミカと二人だけで話したいことがあるんだ……ですが」

「だろうね」

シフラは事情を察したかのようにうんうん頷きながら、

「いくらでも話してきなよ。あたしは気長に待ってるからさ」

許可をもらった少女はこくと頷き、美女を伴って遠くの岩場にむかった。

彼女らが何を話すのか、シフラはさほど気にしなかった。

なぜなら、何がどうなろうとミカルは自分の仲間になるからだ。

彼女の中ではそれは決定事項なのだ。

こうと決めたら何があるうと掴み取ってみせるといふ、強烈な目的意識の持ち主なのである。

ふたりは十分ほど話して戻ってきた。

「ありがとうございます」

「いいんだよ礼なんて。それより、ぬかりなく帰んなよ」

「……ご忠告、ありがとうございます。またね、ミカ」

ミカルは表情を全く変えず、一拍おいてから手を振って、言った。
「また」

3、狂気の審判が下された

メロエ国南西部・デルフォイの街道は、闇のとばりを完全に落としていた。

そんな、ほぼ真つ暗闇の時分・場所だというのに、ふたつの人影が道を闊歩かつぽしている。

シスターの格好をした美少年・サファイラトリフォンと、隆々りゅうりゅうとした体軀たいくを有する傭兵・ラザロⅡヴァシャである。

かれらの属する組織はもう目と鼻の先であり、ともに首領に意向いこうを伝えねばと心を決めていたのだが。

その彼らの前に、ひとつの人影が立ちはだかった。

身体せたいけの線や背丈せたいけからは男とも女ともいえず、しかもこの夜中で全身に黒衣こくいを纏まとっているのでは、姿をとらえるのがやっとなかった。

「何もんだてめーは」

大男おおみが凄味すこみをきかせながら背の両手大剣ツヴァイハンダーを握る横では、すでに美少年が細身剣レイピアを抜き放っている。

謎の人物は問いにはこたえず、代わりに右手をかけた。

いや、かかげたのではなく、何かをふたりに向かって放り投げたらしい。

暗闇に同化したそれをふたりは捕捉ほそくできず　いや、ある程度はできたが、なにぶん拡散範囲かくさんが広すぎた　顔からまともに浴びた。

なにかがなにかに反応し、ふたりに異変が起こる

「うっ……　　がはっ！！」

「お、あ……！！」

と、美少年と大男は、同時に大量の血液を吐きだした。

ともに剣は手放さなかったものの、地面に手をついてうめき声を洩らしている。

「知っているか」

黒衣の者が抑揚のない、男か女か区別のつかぬ声で言った。

「砂金は希少価値が高いが、とある薬品　これもまた希少価値が高いのだが　と混ぜると、毒薬になる。

だが、致死的なまでの毒ではない。その効果は戦闘不能に至らしめる程度だ」

手放しそうな意識の中、サフィラはこの黒衣の言葉からひとつの事実を感じ取った。

今、自分たちが浴びたのは砂金だ。

そして、自分たちはいつの間にか、この者のいう「とある薬品」を摂取させられていた……？。

では、いつだ？　そして、これは誰だ？

なんのために自分たちを手につけようとするんだ……

「く………くそっ………こん、な………ぐガッ

！！」

となりで地を這っていたラザロが出した緑色の嘔吐物は、大きくはねてサフィラの顔にピツとかった。

嫌悪感を抱く余裕などない。

自分も胸のあたりからえずきを感じていて

「う、え、ッ！！」

と、少女顔の美少年も男と同じようにもどした。

手足は強烈にしびれ、涙は止まらず、胃が激しい痛みを訴えていた。

「なぜ、人は生きるのか知っているか」

黒衣の者は抑揚のない声でいった。

「理由などない。生きているから生きるのだ。その間は本能のおもむき赴くままに、やりたいことをやればいい」

この言葉から、サフィラはこの者の正体を悟ってしまった。

「な、ぜ……………」

思わず呟いたひとつとは、いつのまにか眼前に立っていた黒衣の耳に届いていたようだ。

「なぜ」

黒衣の独白には感情が乗っていなかった。

「それが、あたしのやりたいことだったからよ」

この台詞にはふたりともが眼を剥いた。

「……………なん……………」

ラザロの口からはもう、言葉が紡げないようだった。

ふたりはそれぞれ異なる気持ちで憤怒の表情を浮かべたが、もう

何もかもが手遅れだ。

「ふたりとも、良い声で叫んでね」

黒衣は刃薄剣を両手にもち、うずくまっているサフィラとラザロの、それぞれ異なる肌、身体に、ゆつくりと滑り込ませた。

「やつ、め……………ぎゃああア!!」

「っグああ……………!!」

美しい少年と陰相の大男の断末魔は、およそ一時間ほどもつづいた……………

二章 終

狂気の審判が下された（後書き）

二話を読んでくれた方に、心から、ありがとうございます！！

知りえぬ今生の別離

三章「今生の別離」

1、剣士の矜持

ミカル「フィリポスが眼を覚ましたのは、月光がおぼろげに照らされた夜更けだった。

パルミラ国最南端の街・タルシエンの宿「剛毅の巖」。

「石の町」といわれるタルシエンだけあって、建物のすべてが石造りだが、寝床まで石だと慣れぬ旅人にはつらいものがある。

しかし、一童顔の美女が目覚めたのは眠りづらさゆえではない。

となりの寝床で眠っていたはずの美女の姿が 彼女は雰囲気で勘付いたのだが 見当たらないからだ。

「……………」

ミカルは無言で寝床からはいでて、寝間着から普段着にきがえろと、足早に宿を脱した。

彼女自身は気配を消すのが得意だし、この街には扉が一つもないため、宿の者にはまったく気づかれずに抜けることができた。

さて、ミカルは全面的にシフラ「マタティア」を信用しているわけではない。

こんなことがあるから尚更だ。

ひそかに抜け出して自分を陥れようとしている可能性もなくはないが、どうやら違ったようだ。

シフラは街の外れの過疎地に火をおこし、素振りをしていた。

それもなにやら妙な素振りである。

右手で炎波剣を繰っている彼女は、それを様々な位置や構えで防御姿勢をとったり、止めたりして、架空の相手からの攻撃を受けている……。

かと思えば、足元スレスレに剣を払ったり、天へ切っ先をむけたりと、ほんとうに妙な動きだ。

イメージ・トレーニング
想像訓練と形容したほうがいいかもしれない。

ミカルは少し感嘆かんたんしていた。

自分も幼いころは厳しすぎるほどの修練を強制されたが、こんな修練方法はやった覚えがない。

「練り込みねこ」や「速振りはやぶり」はやらされたが、こんな「楽そうな」修行など、彼は認めすらしないだろう。

しかし、シフらは相当集中しているためか、すぐそばで眺ながめているミカルに気づいている様子はない。

その奇異きいな研鑽けんさん法にすこしだけ眼を丸くした美女だったが、彼女が自分に対しよからぬ所業しょぎょうを企くわてているのではないかという懸念は晴れ、ほっと胸をなでおろした。

美女は安堵あんどしつつ、用心ぶかく宿に戻ろうとした、その時だった。「あたしの秘密特訓をただで見ときながら帰ろうなんて……あんたが初めてだよ」

声を掛けられたと認識したミカルは、仕方がなく足を止めた。振り返ると、焚たき火に照らされてほどよい汗をかいた中性的ちゅうせいてきな面差もさしが、意味ありげな微笑を湛たたえて自分を見つめていた。

「悪いね、勝手に抜け出して。でもあたしや寝る前にこうして汗かかないと、どうも落ち着かなくてねえ」

ミカルは一拍おいて、思ったことをそのまま口に出した。

「キタナイ」

「へ……？」

シフらは一瞬きよとした。

それから間もなく、盛大に吹きだした。

「あはははっ……！ 確かに、汗かいたまま寢床ねいじにもぐるのは汚いかもね。でも、あたしやそもそもベッド自体嫌いだからね。壁によっかかって寝るのが一番落ちつくんだ」

ミカルはシフらの言葉をしっかりと咀嚼そしゃくしてから、じつくりと考

え込んだ。

ベッドが落ち着かないというのは彼女も共感するところがあったし、この北国では寒さゆえ眠れぬこともある。

備え付けの毛布だけでは十分に暖をとれるとは言いがたい。いちおう話の筋は通っているが、そのまま引き下がるのも癪にさわるというか、釈然としない。

ミカルはひとつ抵抗してみることにした。

「コトワってホしかった」

「ごめんごめん。そうするべきだったね」

謝ったところで、シフラは畳み掛けるように喋りかける。

「ところで、訊きたいことがあるんだけど」

シフラは、表情の変わらない青髪的女剣士を見すえ、こころもち慎重に言葉を選んだ。

「あんたのその剣……もしかして、カタナってやつかい？」

この質問には、二十秒もの沈黙のあと、ようやく答えが返ってきた。

「そう」

二十秒かけて出した答えは、ごく短い一言で終わってしまった。

シフラもこれ以上訊こうとは思わなかった。

教えたくないから長いこと黙考していたのだろっ、と慮ったからである。……違つかもしれないが。

「ところでさ、あんたもちよつと修練に付き合わないかい？」

思わぬ誘いを受けたミカルだったが、やはり表情は変わらない。

感情の動きによって表情が変化するという事を忘れてしまったかのようだった。

それも、演技ではなく、彼女は実際に無表情でしかいられないのだろっ、とシフラは思った。……やつかいである。

少女の域を抜けきれない美貌の女剣士は、ゆっくりと口を動かす。

「わたしがあいてする」

「けっこう。じゃあ、剣も持ってきてるみたいだし、軽く打ち合おうか」

ミカルは、多くの東洋剣士に見られる構えのうちの一つ、脇構えわきがまを主流としていた。

やや中腰の姿勢になり、左腰に帯びている刀をにぎり、自分から行くよりは、どちらかといえば「待ちうける」のが基本戦法である。そして、攻撃範囲に入った敵を一刀のもとに居合いあいぬく……のはあくまでイメージでしかなく、実際には刀を抜いたら相手が絶命したと確信が持てるまでひたすら剣をふるうことの方が多い。

たとえ的の首を撥はねたとしても、すぐに刀をしまうのは愚行ぐこうのきわみといえる。

実際、眼前の敵を斬首したあとに格好つけて刀を鞘におさめた直後、視界の外にひそんでいた曲者くせものに斬られるというお笑いぐさな話は珍しくもないのだ。

話は逸それるが、ミカルは東洋剣士の多くがそうであるように手数の多さで勝負するタイプだ。

しかし、彼女の故郷中をさがしても、彼女以上の太刀捌たぢはきを有する人間をみつけるのは不可能にちかい。

その線の細さ、背の低さゆえに膂力りょりよく・体力には難があるものの、速さにおいて彼女の右に出るものはいないとされている。

一方のシフラはどんなタイプかといえば、ずばり万能型オールラウンダーである。

彼女がもつ炎の剣・フランベルジュは本来は両手剣りょうてけんだが、彼女はそれを片手で振りまわすことが可能なのが最大の強みだ。

女性としては図抜ずぬけたその膂力すこも男とくらべれば上の中程度（十分凄いのだが）、しかし剣技・体力・精神力も、膂力と同様に擢ぬんでたものを持っている。

敏捷びんしょうにほんの少し不安が残るが、変幻自在というよりは相手に先を読ませないそのうごき、そして逆に相手のうごきを読んで剣を繰りだすかけひきの巧うまさを鑑かんみれば、ミカルとは互角以上に渡りあえ

るはずなのだが……。

シフラが彼女をはじめて見たとき感じとったのは、「自分はあの子に敵わない」というイメージだった。

逆にいえば、自分がミカルに打ち勝つイメージをえがけなかった。なぜそんなイメージを抱いたか？

ひとつは、彼女の拳動ひとつひとつにまったく隙がなかったからだ。

表情はかすかにも変化をみせないし、足運びにしても、右手はいつも剣を握っているところにしても、それに、何げなく人物の空気を観察しているところにしても、とにかく、自分の身の安全に対しては少しも気を抜かないのだ。

それだけに、彼女が宿屋で先に寝入ってしまったのにはおどろいた。

自分は狸寝入りたぬきねいをしながらミカルの美貌ひょうめいを見すえていたのだが、彼女のは自分のそれとは違った。

本当に意識を手放していた。………あれはなんだったのか？

ふたつめは、彼女が何を考えているのか全く分からないということ。

……これはある意味、ひとつめと大した差異さいはないかもしれないが。

要するに、シフラは「未知のもの」が苦手なのだ。

表情・行動・仕草などから放たれる空気・雰囲気によって、相手の力量を読むのを得手えてとするシフラには、それらに全く……いや、ほぼまったく色がついていないミカルを相手にするのは、認めたくはないが、怖い。

だが、今から行われるのは殺しあいではなく、単なる手合わせである。

相手の力量を計ることができる好機チャンスだ

シフラは、脇構わきがまえするミカルをまっすぐ見据えて、不敵ふてきに言い

なつ。

「いちおう言つとくけどね、これはただのお遊びなんだからね。マジんなつて打ちかかってくるのはやめとくれよ」

もともとアテにはしてないが、いちおう言っておく。

童顔の美女はいつもの無表情で、一拍おいてからうなずいた。

「あなたをコロすつもりはナシ」

なんかひっかかる言い方だねえ……と思ったシフラだが、口には出さない。

シフラ
ミカルより頭ひとつ半も高い大女は、いったん瞑目し、それから厳かに宣言した。

「さ、はじめるよ」

げんか
言下に

！

シフラ
女はその大きな身に似合わぬ疾風迅雷の振りおろしを、美女の頭頂部へ豪快に見舞った！

ガギンッ！！

と、それはミカルのなぎ払いによりあっさり弾かれたが、シフラがその並外れた臂力を揮い、立て直すいとまを与えず再び振りおろす！

ギイン！ 「っ……………」

かすかな息を吐いた美女はなんとか受け止めたが、受けにくい体勢での防御を余儀なくされた。

そして、大女は心中で驚いていた いや、どんな反応をしても結局は驚いているのだろうが。

ミカルがまったくの無表情なのだ。

ぎゅっと閉じられた口唇の中では歯を食いしばっているだろうが、それでも顔色はまったく変わらない。

……なんの感情も塗られていない。

……これでは逆に本来の実力を揮えないのではないか。

ギリギリとした罅迫りあい、完全にシフラが攻勢、ミカル

が劣勢だ。

上から押しつぶすようにせまるシフラを、どうにか押し返そうとするミカルだが、傍から見れば無駄な足掻きでしかなかった。

しかし、ありえないことが起こる。

ミカルがやにわに両腕の力を抜いて青い刀をはなすと、細い身体が考えられない動きで炎波剣を逃れつつシフラへ回りこみ

ヒュカツ！ 「くはあっ……！！」

見事、シフラの頸椎に手刀が一閃され、乾いた打音がひびいた！

意識の揺らぎとともに剣を取り落としそうになる…… が、生

来の負けず嫌いである彼女は、そんな選択肢を断固として否定した。柄を握りなおし、両足をふみしめて苦痛を耐えしのぐと、振りむ

くと同時に炎波剣をなぎ払 おうとして、とめた。

赤い剣が白い羽織をまとった美女の腹部スレスレにとまり、その彼女はといえば棒立ちになって大女を見つめていた。

覇気もなければ感情もない。

シフラは馬鹿馬鹿しくなってしまった。

が、先に口を開いたのはミカルだった。

「おアソびじゃなかった」

「……………なんだって？」

どうやら非難されているらしい事実には、女はイラついた。

それでなくとも、途中で意識を失いそうになったうえ、それをせつかく立て直したところで勝手に戦意を失くされているのだから余計だった。

「お遊びに決まってるだろ！ このあたしがただの手合わせで本気を出すとも思ってたのかい？！」

女性にしてはかなり野太い声を張り上げながら、女は美女の深黒

の双眸を真向から捉えていた。

彼女は間を置いてこういった。

「あなたは卜めるつもりがなかった」

ミカルの声音はどんな時でも同じで、こうして相手を非難する時

もまったく変わらない。

抑揚^{おさげ}がなく、少し掠^{かす}れていて、呟^{ささ}くように発声するのにとてもよく通る。

それが今はシフラの癪^{しゃく}にさわったのだが、美女はさらに続けた。
「わたしがウケトめてすかつたらどうなった」

「……………はあ??」

ミカルの言葉に、シフラは眉間^{みけん}に皺^{しわ}を寄せまくりながらつめよった。

半分は演技だが、半分は感情を表出するように調節^{ていせつ}している。

「止めてなかったら? あたしが五割の力で出した剣を止められないわけないだろ?!」

シフラは身振りをまじえて怒鳴りつけるが、ミカルはといえばまったく意に介さずという様子である。

このまま引き下がりたくはない。

けれど、もういちど彼女に手合わせを申しこむのも……と一考^{いっこう}えこむ女に、美女が意外な一言を発した。

「ほんきだとオモった」

その言葉 いや、声色に、シフラは一瞬きよんとした。

気のせいか、ミカルの声には謝意^{しゃい}が含まれているように聞えたからだ。

「だからわたしはほんきであいてした。ほんきであなたをタタいた」
これには驚いたシフラだった。

自分が本気など出していないのは事実だからこそ、ミカルの告白がきわめて意外なものとなって彼女の心にひびいた。

しかも、次の一言がシフラにはそうとう効いた。

「イタかった。アヤマらなきゃいけない」

痛かった? と訊ねられ(たぶん……)、さらに頭を下げて謝られてしまった。

ここで引き下がらなかつたらむしろ自分が悪役になってしまうのではないか。

仕方ないね……と思いながらも、女は素直に詫びた。

「いや、あたしも口が過ぎたよ。悪かった」

……一方で、初めてミカルを観察した時、自分はかなわないと思ったあの感覚には大いに疑問を抱いたものの、実際に刃をまじえてわかった。

互いに本気でやりあうことはないにしても、自分と彼女の力量に大した差異はないということだ。

ミカルは本気でやったと言ったが、それを額面通りに受けとるシフラではない。

特に自分にあびせた手刀は、全力に近かったにしても、全力ではないだろう。

たしかに彼女は自分と比べればだいぶ非力だが、本気でやっていたとしたら自分は昏倒していてもおかしくないはずだ。

逆に、自分が彼女の頸椎へ手刀を見舞えば、絶命させられる自信がある。

もっとも、命を賭した闘いであつたら、そんな場面が訪れるとはおもえないが。

……ふとシフラは、ミカルが氣遣つてくれたという事実気付いた。

普段はきわめて感情表現が希薄なのだが、もし、そう、のであればと考えると……急に彼女がかわいく見えてきた。

中身が、である。

シフラは穏やかな表情を浮かべ、口をひらいた。

「……もう寝ようか。あんたも疲れたる？」

ミカルは一時おいて、こくりと頷いた。

シフラは微かな笑みを浮かべ、眼を瞑る。

……久しぶりに。それも、十年ぶりくらいに、他人を少し信頼できるかもしれない。

あくまで、かも、とはいえ、シフラはそんな事を考えた自分に驚いた。

確かに彼女　ミカルは変わっている。

というより、障害を持つているのだから、変わっているというのは語弊があるか。

さりとて、シフラだって今まで対人障害者や知的障害者に多く出会ってきた。

彼女にとつてそういった障害者は二つに大別できる。

ひとつめは、全く話が通じない者。

彼らは動物と一緒に、人が持ちうる「善悪」という感覚や倫理観、感情はなく、本能だけで動き回る。

精神に介入する余地はなく、あつという間に淘汰されるので、成人まで生き延びているのは珍しい。

仮にそこまで成長したとしても、すぐに強盗や強姦、家族への暴力などで、やはりすぐに排除されてしまう。

ふたつめは、多少は話を通じる者。

彼らのなかに、人間で言うところの「悪人」はほとんどいない。奇異な行動が周囲に害を及ぼすことがあっても、本人にはまったく悪意がない。

倫理とか道徳を説いても彼らには理解してもらえない。

「理解できるけど知ったことじゃない」考えの「悪人」とは異なるのだ。

そして、ミカルはそのどちらでもないように見える。

何を考えているのか理解らないという点は変わりないが、彼女の場合、何らかの意志や目標を……それも確固たるものを持っているように見える。

その上、知性が感じられるのだ。

シフラは、そこに僅かな希望を見いだした。

この子と良い旅路を行けるといいな、と。

そうなれば、今までの一人旅の最中に味わった孤独感も、多少は薄れるだろうから……

2、主従の瓦解しゅじゅうがかい

「ラザロ」ヴァシヤとサファイラ「トリフォンの遺骸いがいを、我々の組織の真ん前で発見しました」

「煉獄れんごくの剣けん」の重臣じゅうしん、キュロス「アキオルは、首領アシエルに淡々《たんだん》と報告した。

男にしては大きな銀眼ぎんがんに、後方に大きく伸びた黄緑の髪。容姿を一言で表すなら「犬」という形容けいようが相応ふさわしいか。

性格自体も首領には非常に従順じゆじゆんであり、生真面目きまじめである。

青い革ジャケットと白無地の脚衣きゃくいをきこみ、左腰にはオーソドックスな長剣ロングソードを下げ、背には円盾ラウンドシールドをしょっている、どこにでもいそうな並身瘦軀なみしんそくの傭兵青年だ。

「……………死因は？」

と訊ねたのは、キュロスより頭一つぶんは小さい、黒衣に全身を包んだ男・アシエルである。

姓せいは明らかにされておらず、また本人も明かすつもりはないようだ。

深い陰けんを帯びた真紅しんくの双眼そうがんに、暗緑色のとげとげしい短髪あんりよくしよく、褐色かつしよくをぬった顔立ちは端整たんせいではあるものの、見るもの全てを拒絶きよぜつするような禍々まがまがしい雰囲気そつしよくが発せられている。

なにげなく装飾そうしよくされている黒曜石の耳飾オフシティアン・イヤリングは、彼の心を映し出しているのかもしれない

「斬殺です。……………それも、正気のものとは思えぬほど、徹底てつていして斬り刻まれていました」

キュロスの声は普段とさほど変わらないように思えるが、アシエルは彼の声音こわねに様々な感情ひあいが含まれているのを察知した。

悲哀ひあい、憤怒ふんぬ、慄然りつぜん、そして……………わずかながらの喜悦きえつ。

ヴァシヤとトリフォンが殺されたという事実に対するやりきれな

気持ち、彼らに手を下した者に対して覚える強い憤り、そして、
けて弱者でなかった二人をいつぺんに、それも惨たらしい方法で
殺されていたことに対する恐ろしさ。

そして、隠しようのない、まるで性衝動のようにぞくぞく戦慄え
る興奮……。

そんな普遍的な感情を、このいつもは淡泊な青年が持っていたこ
とに、アシエルは少し安心した。

「そう、か……。確か彼らにはフィリポスを追うよう命じていたは
ずだが……」

「仰るとおりです。しかし、恐らく何かしらの理由があつて彼らは
『失敗した』と判断し、組織にもどつて指示を仰ごうと考えたので
しょう。…… 自明の理ですが、ラザロとサフィラを殺したのは
ミカルではありません。……これは言つてはいけないことなのかも
しれません」

そう前置きして、キュロスは意を決し、認めたくない事実を話し
始めた。

「……彼らの遺体から毒薬が検出されました。それも、砂金毒と呼
ばれる、とても希少価値が高いわりに有用性が低いものが検出され
たのです」

「……………」

「ぼくはあまり薬品の扱いには詳しくありませんが、彼らは最初か
ら砂金毒を含まされたのではないと見ています」

「……………」

「砂金に反応する薬をなんらかの方法で含まされ、それから砂金を
ばらまかれた。身動きできない彼らを、犯人はなぶり殺しにした」

「プリスキラに訊かなければならんということだな……」

「ま、まってください！」

キュロスは声を荒げた。

「まだ彼女が犯人と決まったわけでは……」

「……お前が暗に言いたかったのはそういうことだろう」

「っ……………」

キュロスはうなだれ、言葉を失った。

彼とてプリスキラ　リベカせいの姓だ　が犯人と断定したわけでないが、可能性はきわめて高いという後ろめたさが、彼の口をつぐませた。

「……プリスキラにもフィリポスを追うよう命じている。彼女はやつと仲が良い……巧く引き戻してくれればと期待を寄せていたが……」

キュロスは、話すべきでは無かったかもしれないと後悔していた。自分は可能性について示唆しただけなのに、首領の口ぶりはどこか彼女が主犯と確言している感じがしてならない。

第三者が介入かごんせうしている可能性も低くはないのに……。
青年の思いをよそに、アシエルは話を進める。

「……シエシユバツアルとツイドキヤの二人を、フィリポス探索たんさくに向かわせる」

「は……………はいっ」

「……確か、プリスキラの出動期間は一週間だったな」

「はい……………」

「彼女が期間を破ったことはない。……明日帰ってこなければ、それに対しても何か手を打たなければならん……」

「……………」

「……我々も覚悟を決めねばならぬ時が来たのかもしれない。それが何かは判らぬが、な……………」

なにやら思案せりふげな科白を吐くアシエルを見たキュロスは　彼に会ってから初めて、否定的な感情をおぼえた。

今となつてはそれを拒否する理由もないような気がした。

同時に、なぜ自分は彼アシエルに対してこんなに従順だったのだろうと、今になつて不可解におもった。

心身ともに破滅しかけていた自分を拾ってもらい、右腕として立ててくれ、信頼を寄せてくれる……

実際にアシエルは、組織の上にたつ人間としての素養をほぼ備えていたし、自分もこの人に尽くしたいと、そう……思っていたはずなのだ。

最近それが揺らいできた理由は今でもわからないけれど……。

確かに首領のいうとおり、覚悟を決めておく必要があるだろう。

どんな窮地に陥つても、みずからの信念を貫きとおせるだけの覚悟を……

3、知りえぬ今生の別離

パルミラ国の南東部。

広大にひろがる乾いた荒野に、丘陵がそこに構えている地・

カッパドキア。

どんよりした曇り空のもとを歩むのは、色合いがまったく異なるふたりの女剣士だ。

男と見まごうような容姿・体格の大女と、恐ろしいくらいに美しい童顔の女性。

彼女達は「石の町」タルシエンを発つて四日を経ようとしていた。

「やつほう、姉さんたちい。お久しぶりい」

予定調和とばかりにふたりの耳に入っただのは、人をくったような軽そうな少女の声だった。

ショート・ウルフカット

そして、燃えるような短い狼髪の大女・シフラ＝マタティアは、尾行されているには障害物が透けているかのごとく気づいていたものの……相方は無反応だし、無視するのもかわいそうなので、仕方なく反応してやることにした。

左後方を振りかえり、ゆるだるそうな面持ちでその少女の眼を真向から見すえてやる。

彼女は岩場に身を隠し（見えているが）、シフラたちを見張って

いた。

「よおーっ、ひさしぶりー」

気が抜けきった声の大女に、少女はおもわず吹き出してしまった。
「な、なんだ……ですかっ、その反応は?!」

肩と太もみを露出した黒衣の少女　リベカ「プリスキラは、思わず人差し指をびしっとのばして突っこむ。

シフラは、未だにタメ口になる癖が治っていないのでよほどツッコんでやろうかと思ったが、たぶん矯正できないだろうから諦めることにした。

「バレバレだつつうの」

女は意識して呆れた表情を作り、かぶりをふる。

隣にいる青髪の超絶美女・ミカル「フィリポスはようやく振り向き、「リベカ」と呟いていた。

「悪いけどね、こう見えてあたしやあなたの倍は生きてんだからね」

「『こう見えて』はいらないと思いますが」

野暮なツツコミ。当然、無視。

「あんたも気配断ちには自信あるんだろうけど、あたしから見れば青すぎるんだよ」

「マタティアさんが赤すぎるんですよ」

少々、いや、かなり視点がズレているツツコミ。

女は少し口元がゆるんだ。

「そのツツコミもねえ……っ……程度が小さいんだよっ」

「……笑ってちゃ説得力ないですよ?」

「ええい、うるさいねっ!」

シフラは開き直ってリベカを指さし返した。

「だいたいあんたね、タルシエンの宿にもいたろ……しかもあたしらの隣にいたろ?!」

「……ばれてた?」

「ばれてた? じゃないよっ! ……まさか、ばれてないと思ってたんじゃないだろうね」

「ちょっとは思っていました」

少女は後頭部に右手をまわし、両目をとじて舌を出してみせる。赤髪の女はおもわず俯き、おなじく右手掌で額をおさえた。

双方とも、実は楽しんでる側面が強いのだが。

「そんなことより、本題いいですかあ？」

「あんた、そんな間延びした声だしてるけど、何かまずいことがあつたんだろ？」

ふいに迫力ある真顔で尋ねられた少女は、僅かなあいだ面食らったが、すぐに人をくったような笑みを浮かべて取り繕った。

「分かるんですか？」

「何となく。当てずっぽう。女の勘。さあ、どれだと思う？」

「アてずっぽう」

いきなりミカルが口をはさんだ。

シフラはあからさまに顰めつらした。

「……なにげに失礼だねあんたは」

言いながら、覚えた違和感に思惟をめぐらせる。

ミカルはときどき言葉を返すのが早い 常人にとってのふつう

程度だが ことがある。

さつきだつて、自分のセリフのあとミカルが口をはさんだのに一秒かかったかどうか。

十秒くらいかかるのが彼女にとっての普通だが、今みたいに一秒足らずで答えることもあれば、ゆうに二十を数えたこともある。

一体どんな仕掛けなんだミカルは。

シフラはそういいたいくなるのを堪え、リベカのおどけない面立ちをみつめた。

「……まあどれでもいいんですけど、その通りなんです、マタティアさん。よからぬことが起こってしまいました」

よかないよつ、とつつこみたかったが、少女も自分に倣って真剣な顔つきになったので自重した。

『煉獄の剣』のメンバーがふたり、何者かに殺られました。誰か

は分かりますとおもいますが……」

「あいつらが?!」

シフラは少し驚きの声を発し 実際には驚いたのだが 同時に「まずったね」と思った。

そう簡単に感情をさらけ出さないのが彼女の中で鉄則となっており、この程度ですらこころもち悔やんでしまうのである。

が、さすがに切り替えも早い。

いきなりではなく、徐々に表情を調節しながら変えていき、口を開きはじめた。

「……もう動いたんだね。『煉獄の剣』の首領が」

平静を装った声できいてみた女だが、内心では実際に首領が殺つたと断定はしていない。

第三者が殺つた可能性もあるし、彼女が手をくだした可能性だつて捨てきれないだろう。

「煉獄の剣」のことについてシフラには五分の一程度の知識しかなく、メンバーに至っては何人いるかどうかはもとより首領の名前しか知らなかった。

シフラが知っているのは、犯罪者だけをねらう暗殺組織であり、罪を犯したという確証がない（とアシエルが判断した）人間に対しての殺害依頼は決して引きつけず、また仕事は必ず夜間おこなわれる、という三点だけである。

その「煉獄の剣」に入って二ヶ月のリベカの証言によれば、首領アシエルは生き血に対して異常な欲望を発する殺人狂であり、その衝動が「煉獄の剣」のメンバーにまで向けられてきたのだという。

「そこで、マティアさん……… 単刀直入に、頼みたいことがあります」

柔和だった少女の目つきが、だんだんときつくなつて真にせまるものになったのを視認すると、大女は意図的に飄々とした表情と仕草をみせ始めた。

「なんだい、そんな改まって。言っとくけど、あたしゃこの子の判

断にしか従わないよ」

「……………」

「ま、この子の判断だって間違ってると思ったたら従わないけどね」

「ミカと二人で……首領アシエルを殺してください！！」

リベカから悲痛な声で衝撃的な頼みをうけたというのに、女の中性的な顔色にはまったく変化がなかった。

表情は動かずとも　　心の中は目まぐるしく動いているのだが。

「……なんであんたんとこの首領リーダーをあたしが殺らにやならないんだい？」

「そんなの自明じめいでしょうが！　このままあいつをほっといたらあたしもみんなも殺さ……　　っ！」

口上をつづる途中でハツとしたらしく、少女は言葉をとめた。

それから辺りを見回し、シフラの鮮やかな緑の眸ひとみをしっかりと見つめてから、深々と頭をさげた。

「……ごめんなさい」

「いいよ、気にしないで」

　　つても気にするだろうけど。

それにしたってやっぱり、十五歳ごうとしの女の子にしては大したもんだ。あくまで平均から見ただけど、ね……………。

　　と、シフラは特に感情を揺れ動かされることもなく思索しよくを巡らせ、ふと、ミカルミカルのことが気になった。

彼女は今のリベカの発言についてどう思ったのだろうか？

シフラはミカルの思考がまったく言っていいくらい読めない。

割合でいうなら……せいぜい二割程度か。

いまでも其れそとなく彼女の艶美えんびな面差おもてしを窺うかがっているのだが、やはり無機質むきしつな能面のうめんに動く気配はない。

まったくやっかいだと思う。

ミカルにあつてから何回「やっかいだ」思っただろうか、などとうでもいい思惟しゐに耽ふけっていたら、彼女の口が突如とつじょうこき始めた。

「わたしはみんなをスクウ。そのためにひつようなものがアる。リベカはそしきにモドって」

.....。

赤髪の大女と茶髪の少女は、そろって黙り込んだ。

ふたりの頭には様々な疑問が浮かんだが、先手を打ったのはシフラのほうだった。

「ひとつ訊きたいんだけどね、あんたにとってあたしが仲間になるのは、そつていがい想定外だったんだろ？」

いつとき一時おいてミカルはうなずいた。

これが「想定内だった」としても今は驚かない。

「もうひとつ訊きたいんだけどね」

今度はすこし気だるそうな面持ちで訊ねる。おもも

「あんた、首領に敵わないと思ってるだろ？」

こういうことを訊いてもやはり顔つきは変わらない。

他人からうけた言葉の意味に理解が及ぶのに、そこまで時間がかかるとは思えないのだが。

しかし、シフラの中には可能性として、「彼女のこれは演技かもしれない」という頭がある。

ミカルは八つほど数えてから口をひらいた。

「わたしひとりでは力ナわない」

「じゃああたしと組めば殺れるわけだ」

意味があるとは思えないが、かんぱつ間髪いれずに言葉を投げかける。

だが、それについての答えは、いくら待っても帰ってきそうになかった。

リベカはすこし不信感を顔にあらわし、シフラは堪えきれず再度質問をする。

「じゃあ断定しよう。ふたりでたいじ対峙すれば殺れる。

けど、あんたは何らかのわけがあつてそうしたくない。違つかい？」

ミカルは九秒後にゆっくりとうなずいた。

シフラは、「何らかのわけ」が「みんなをスクウ」ためとは、まったく信じていなかった。

すでに二人が殺られているのだから「みんなをスクウ」のはもう無理だ。

そして、放っておけば「煉獄の剣」のメンバーは次々に殺される（のだろう）。

首領は全員を屠^{ほぶ}ったあと、町や村や王都で、殺戮^{さつりく}の欲求を存分に発散するかもしれない。

いつかは捕まり、断頭台^{ギロチン}に送られるだろうが……。

どちらにせよ自分も関わってしまっている以上、ただ傍観^{ぼうかん}してるだけというわけにはいかない。

ここでふと、女は熟考^{じうこう}した。

首領アシエルというのは、どれほどの使い手なのだろうか？

シフラはミカルを一目見たとき、自分は敵わないと直感したが、それは間違^{にんしき}った認識だった。

実際に剣でふれあつて、自分は彼女と互角以上に張れると確信した。

その彼女が、言葉……と、雰囲気から察するに、首領を恐れているように思える。

ここで、黒い薄着の少女がふいに喋^{しゃべ}りだした。

「ねえミカ、あたしは組織にもどつて何すればいい？」

リベカの声がこころもち弱々しそだったのが、シフラは氣になった。

青髪の美女は間を置いてこたえた。

「じかんカセギを」

「うん、わかった」

茶髪の少女は間を置かずにこたえた。

傍^{はた}から見ていた赤髪の大女は、やや厳しい面持ちで彼女らの顔つきをつかっている。

このふたりは一体、言葉の外でどんなやりとりを試^{しる}みていたのか

を、シフラは見抜こうとしていたのだ。

彼女達は確実に、自分に知られぬよう何らかの情報交換をしている。

そんな彼女に対し、リベカが真摯な目線をよこして ほんの一時
瞬そらしてから 小さな口唇を慄かせながら動かしはじめた。

「マタティアさん、ひとつ、おねがいがあります」

三章 終

知りえぬ今生の別離（後書き）

「剣女ふたり」第三章を読んで下さった方に、大いなる感謝を！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7948m/>

剣女ふたり

2010年10月8日13時40分発行